

茶樹のつぎ木とその利用について

讃井 元・安間 舜・松下 繁
(茶業試験場枕崎支場)

SANUI, H., AMMA, S. and MATSUSHITA, S.
On the Grafting of Tea Plant.

永年性作物である茶樹の育種はきわめて長年月を要し、現在までに登録された紅茶用品種は交配後 20 年以上を経過している。これは茶樹の幼苗期における生育がおそく、品質・収量の検定、苗木の獲得に長年月を要したからである。

筆者らは茶樹の育種年限短縮に関する研究の一環としてつぎ木をとりあげ、交雑育種・繁殖の能率化をはかりたいと考え、つぎ木繁殖の研究に着手した。

茶樹はタンニンの存在、組織細胞のち密なこと、癒傷組織の再生が遅延することなどによつて、つぎ木は困難とされ、実用性は認められなかつた。しかし過去において農林省茶業試験場あるいは台湾総督府農業試験所・平鎮茶業試験支所の報告によれば、つぎ木の可能なことを報じており、谷村・只佐 (1940) はアッサム種と台湾自生種とのつぎ木 (寄つぎ) に成功している。インドネシア (旧蘭印) においては LEERSUM (1911), BERNARD (1913), KEUCHENIUS (1923) の研究により Crown Grafting が用いられ、ソ連の KVARAZKHELIA (1933) も芽つぎによつて 57% の活着を得たと報じている。また COHEN STUART (1930) は Keuchenius, Mass らによつて營養繁殖に関する価値ある研究がなされたが、これが屋外において実際化されねば云々ということ述べている。これらの報告から茶樹のつぎ木は不可能ではないと考え、果樹・桑樹において慣行される種々の方法を茶樹に試みてきた。

たまたま 1956 年春、前年伸育した秋芽の先端緑色部をつぎ穂として切つぎを行ない、低率ではあるが活着せしめることに成功したので、これが実用化につき継続実験を行ない若干の成果を得た。本試験はまだ緒についた段階で今後またねばならぬ問題が多いが、ここに本年までに得られた結果の概要を略報する。

(1) 従来実用性を認められなかつた茶樹のつぎ木は、つぎ穂の乾燥防止とその熟度が成否に重要な影響をおよぼすことがわかつた。

つぎ穂の乾燥については、つぎ木の際にポリエチレン袋で被覆して高湿度を保ち、さらに炭俵などで平屋

根式口覆を施すことにより防止でき、普通の切つぎで十分活着せしめることができる。

つぎ穂の熟度については、褐色硬化部位よりも未硬化部位が適当で、前年秋芽の枝条先端緑色部を 2 葉 2 節とし、葉は葉脚より 1 cm 内外で切落したものをつぎ穂に用いる。

(2) つぎ木の時期は春先が最適で 3 月下旬～4 月上旬とする。なお 7 月も切つぎが可能である。

(3) 切つぎの場合、台木は樹令 2～5 年、直径 1 cm 内外が適当である。しかし活着後の生育は樹令の進んだ台木の方がよい。

(4) つぎ木の生育はさし木と格段の差異があり、2 年目で本ぼ定植 3～4 年に相当した生育を示す。

開花はつぎ木当年あるいは 2 年目より始まる。つぎ木やぶさたでは 2 年目に開花 500 をかぞえ、3 年目に 100 果 250 粒、4 年目に 380 果 940 粒の種子を採取できた。なお開花促進を目的とするときは台木 2～5 年のものを用いて切つぎを行なうとよい。

(5) つぎ木を繁殖に利用することは増殖能率促進に効果的で、特に紅茶園造成、新品種普及に果たす役割りは大きい。例えば母木 100 本から 20 ha の茶園造成をする場合、さし木のみでは 7 年を要するが、つぎ木とさし木を組合せると 3 年で達成できる。

(6) つぎ木の親和性の品種間差異は認められるが、実験例が少なく、今後詳しく調査したい。また台木の穂木におよぼす影響についても今後に残された重要問題である。

(7) 成木を台木に用いた場合、その生育はすこぶる旺盛で、つぎ木 6 カ月で定植 3 年目の園相を呈し、今後確実性と生育の均斉度、台木のほう芽性について研究の要があるが、選抜過程における性能調査などに利用できることがわかつた。なお成木台木の場合には切つぎよりも皮下つぎの方が活着率も高く、操作も簡単で能率的である。

以上のようにつぎ木は容易で利用面は大きい。親和性・台木の穂木におよぼす影響・台木のほう芽性など多くの問題が残されている。今後これらの解明に努めねばならない。